

論理的でまとまりのある文章を書く力を育成する学習指導の在り方

－統合的な言語活動のプロセスを工夫したライティング指導を通して－

福島県立二本松実業高等学校安達東校舎 教諭 伊藤 征洋

1 研究の趣旨

本研究では、「与えられたテーマについて、情報や考え、気持ちなどを、理由や根拠とともに複数の段落を用いて相手に伝わりやすい内容で書くことができる力」を「論理的でまとまりのある文章^{※1}を書く力」と定義した。ここでは、これまで広くライティングの指導に応用されてきた文章産出の認知処理の一連の過程^{※2}（計画、文章化、推敲）を繰り返すことがその力を高めるのに有効だと考えた。そこで、「書くこと」領域とそれ以外の領域の言語活動を、どのような順序でどのように組み合わせるのかという、統合的な言語活動のプロセスを工夫する。そして、その指導過程を単元の中に複数回取り入れることで、主題の力に迫ることにした。

※1 本研究における論理的な文章とは、自分の伝えたい主張を、理由（自分の考えや推論）と根拠（自分の理由に対する具体例や客観的な事実）を明確に整理して伝えようとしている文章とし、まとまりのある文章とは、ある一定の語数で構成され、文と文に適切なつながりがあり、トピックセンテンス・支持文・結論文からなる文章構成とした。

※2 Flower, L. S. & J. Hayes, J. R. (1981). A cognitive process theory of writing. *College Composition and Communication*.

「書くこと」の指導において、生徒が文章産出における認知処理の一連の過程を繰り返すことができるように、統合的な言語活動のプロセスを工夫すれば、「論理的でまとまりのある文章を書く力」を育成できるであろう。

2 研究の概要

(1) 【手立て1】書く内容に見通しをもたせるための統合的な言語活動の設定

文章産出における「計画」の処理過程において、「聞くこと」の領域から「話すこと [やり取り]」に取り組みさせる。教師が提示したトピックの内容に関する英語の説明を聞き、書くための目的や場面、状況などを理解する。それらの情報を「誰のために」、「どのような内容を」、「どのように英語表現を使って」書くのかという三つの視点（以下、三つの視点）で整理する。次に「話すこと [やり取り]」に取り組みさせる。互いのアイディアを共有し、書く内容の見通しを持たせる。

(2) 【手立て2】書く内容を充実させるための統合的な言語活動の設定

文章産出における「文章化」の処理過程において、「話すこと [発表]」の領域から「書くこと [初稿]」に取り組みさせる。自分が伝えたい内容を、相手に分かりやすく伝えるための文章構成や表現方法に留意し、書く内容を充実させる。

(3) 【手立て3】よりよく読み手に伝わる内容とするための推敲活動の設定

文章産出における「推敲」の処理過程において、互いにアドバイスし合うピアフィードバックと、自ら振り返るリフレクションを行った上で、「書くこと [2稿]」に取り組みさせる。自分が書いた内容をよりよく読み手に伝わる内容とする。

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○ 統合的な言語活動のプロセスを工夫して、書く力を伸ばすことのできる指導過程の在り方を示すことができた。特に【手立て1】において三つの視点に基づき、書くための目的や場面、状況などに関する情報を整理させることは、生徒が「聞くこと」において書くために必要な情報を理解し、「話すこと [やり取り]」において互いの考えを共有する上で有効であった。

(2) 今後の課題

○ 認知処理の一連の過程である「計画」において、具体的な条件設定の下、生徒同士で、書きたい相手とその内容とに妥当性があるかを確認し合うことのできる時間を充実させる必要がある。また、相手に伝わりやすいまとまりのある文章を書くために、生徒がつなぎ言葉を積極的に使うことができるようになる【手立て2】の再検討が必要である。